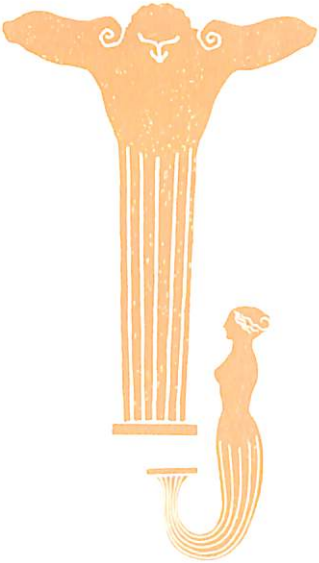
生物兵器テロ



黒井文太郎
村上和巳

宝島社新書
TAKARAJIMASHA SHINSHO

B5

B559.39
1

生物兵器テロ

黒井文太郎　村上和巳

横浜市立大学学術情報センター
00534194
受入

宝島社新書

黒井文太郎（くろい・ぶんたろう）

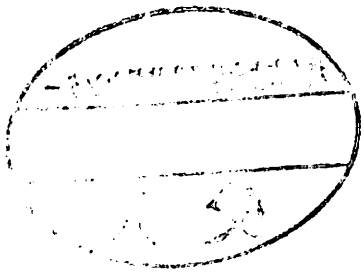
一九六三年福島県生まれ。週刊誌編集者から国際紛争専門のジャーナリストを経て、現在、月刊『軍事研究』アナリスト。主に各国情報機関やテロ組織などの動向＝いわゆる"インテリジェンス情報"の分析を担当している。著書に『世界のテロと組織犯罪』（ジャパン・ミリタリー・レビュー）『紛争勃発』（宝島社）『イスラムのテロリスト』『最新〈国際テロ〉全情報』（以上、講談社）他がある。

村上和巳（むらかみ・かずみ）

一九六九年宮城県生まれ。中大理工学部卒。医療専門紙『日刊薬業』『MEDIAPEX』の記者を経てフリージャーナリストに。旧ユーゴ紛争を中心に国際紛争、軍事問題を専門としているほか、サイエンス分野の取材活動にも取り組む。共著書に『戦友が死体となる瞬間―戦場ジャーナリスト達が見た紛争地』『最強の軍事同盟NATO』『極東の最強要塞・在日米軍』（以上、三修社・アリアドネ企画）がある。

カバー・表紙デザイン：Ren Design STUDIO
本文DTP：㈲マリオ・アイズ

黒井文太郎（くろい・ぶんたろう）



はじめに――予期されていた「生物兵器テロ」

九九年一月二一日、当時のアメリカ大統領ビル・クリントンは、ホワイトハウスの大統領執務室で、『ニューヨーク・タイムズ』の記者の質問に答えてこう断言した。

「今後、数年間のうちに、われわれはテロ組織によって生物兵器の恐怖にさらされることになるだろう――」

この〝予言〟は、それからおよそ二年半後に現実のものとなった。驚異的な殺傷力を持つ粉末に加工された炭疽菌を仕込んだ手紙が、何者かの手によってバラ撒かれ、全米をパニックに陥れたのだ。

今日、私たちが暮らす世界は、生物兵器テロという新たな脅威を迎えている。考えてみれば、テロを起こすための条件はすでに整っているといっていい。

「遺伝子工学の飛躍的進歩で、新型生物兵器が続々と誕生しつつある」

「インターネットの世界には、誘惑に満ちた危険なノウハウが溢れている」

「規律の崩壊した軍事大国では、何でも売ってしまおうという〝闇のビジネスマン〟たちが蠢いている」

「狂信的なテロリストたちは、自分の命と引き換えに異教徒を殲滅することを願っている」

「戦争好きな独裁者が、しぶとく権力を握りつづけている」

――これだけ条件が揃っていれば、何も起こらないと考えるほうがおかしい。

だから、アメリカの炭疽菌テロは〝予期された事件〟ともいえた。ビル・クリントンは、なにもアメリカ情報機関の極秘情報に基づいてトップ・シークレットを打ち明けたわけでもなんでもなく、目前の〝現実〟をただ口にしてみただけなのだ。

では、この恐ろしげな兵器とは、いったいどんなものなのだろうか？　それは誰が、どのように使うのか？　そして、それから身を守るために、私たちはどうすればいいのか？

突然、私たちの前に登場した「生物兵器テロ」にどう対処すべきかを考えるため、本書は企画された。だが、リサーチを重ねて見えてきたのは、絶望的なまでのアメリカと

日本の〝格差〟である。現実に直面する危機のレベルという違いはあるものの、あちらではこの脅威を深刻に受けとめ、現実的な対応を着々と進めている。それに比べて、この国の〝準備〟のなんとお粗末なことか……。

ダイナミックに予算が動くアメリカ政府の政策には、「軍需産業のカネ儲けのためだろう」との指摘もある。確かにそれも事実である。しかし、炭疽菌テロは現実に発生し、あれほどの準備をしてきたアメリカ政府すらも、結局は国民の生命を守ることができなかった。つまり、「準備が足らなかった」のである。

この未知なる脅威との戦いに、たぶん終わりはない。

私たちは、否が応でもそんな時代に生きているのである。

本書は、著者二人が完全な共同作業により執筆したが、主にバイオ・医療の分野を村上和巳が、テロ関係を黒井が調査・取材した。「危機」の中身を知る一助になれば幸いである。

二〇〇一年一二月　　黒井文太郎

目次

はじめに――予期されていた「生物兵器テロ」 3

第1章 シミュレーション！ 日本が生物テロに襲われる日 9

Ⅰ もしも犯罪者がボツリヌス菌をバラ撒いたら？ 10
悪魔の細菌・ボツリヌス菌 15 学生レベルの知識で培養可能 16 細菌・ウイルス取り扱い規制の現状 18

Ⅱ もしも炭疽菌入り手紙が送付されたら？ 21
捜査当局の能力の限界 39 炭疽菌の正体 40 生物テロの〝王様〟!? 42 日本でも炭疽菌テロ騒動 42 炭疽菌ワクチンがない！ 43 炭疽菌感染症の治療法 45 抗生物質は足りるのか？ 47 医療現場の問題 48

Ⅲ もしも天然痘ウイルス兵器が上陸したら？ 50
天然痘ウイルスは闇に流出したか 64 各国によるワクチン確保 66 実用化されなかった安全なワクチン 68

第2章 「バイオ・テロリズム」とどう戦うか？ 71

生物兵器とは何か 72 生物兵器の威力 73 生物兵器の歴史 78 どんな生物兵器が用いられるか 80 生物兵器使用を革命的に飛躍させたエアロゾル化技術 86 遺伝子工学で登場するスーパー生物兵器 90 生物兵器からの防御法 92 ワクチンによる防御 96 日本でのワクチン開発 109

第3章 生物犯罪&テロ――その邪悪な裏面史 111

統計からみる生物テロ事情 112
九〇年代の爆発的増加 115 アメリカから全世界へ 118 二極分化する生物テロ 120
〝毒〟としての使用 124 意外な入手ルート 126 専門知識と技術のレベル 127

生物テロ裏面史 129
カルト教団による生物テロ 129 狂信的思想グループによる生物テロ 139 反政府・ゲリラ組織による生物テロ 148 情報機関・秘密警察による生物テロ 151

第4章　生物兵器テロ「脅威」の真相　167
アメリカ炭疽菌テロの謎　168　テロが日常化したアメリカ社会　170　アル・カイダ犯人説への疑問　174　恐怖のシミュレーション　177　ペスト菌テロの場合――「トップ・オフ演習」　178　天然痘テロの場合――「ダーク・ウインター（暗い冬）演習」　181　炭疽菌テロの場合――ジョンズ・ホプキンス大学のシミュレーション　182　不気味な「ならず者国家」ルート　188　菌株入手ルート　203　ケン・アリベックの警告　206

巻末インタビュー　「謎の殺人炭疽菌はどこから来たのか？」
――アンソニー・ツ博士（コロラド州立大学名誉教授）に聞く　209

主要参考資料一覧　220

第1章　シミュレーション！日本が「生物テロ」に襲われる日

Medical Management of Biological Casualties Handbook,3ed (USAMRIID,1998)
Holy Terror (D.W.Brackett, New York:Weatherhill,1996)
Working Paper:Bioterrorism and Biocrimes,The Illicit Use of Biological Agent since 1900 (W.Seth Carus, Washington.D.C.: Rev.National Defense University, 2001.2)
Chemical and Biological Terrorism:The Threat According to The Open Literatures(Ron Purver, Canadian Security Intelligence Service,1995)
Toxic Terror: Assessing Terrorist Use of Chemical and Biological Agents(Jonathan B.Tucker, 2000)
A Profile of WMD Proliferants Are There Commonalities? (A Brian Anderson, ir Command and Staffcollege,US Air University,1999.5)
The RAND-St.Andrews Terrorism Chronology
The International Policy Institute for Counter-Terrorism: web report
Journal of American Medical Association
Emerging Infectious Diseases
Journal of Infection Disease
Clinical Infectious Diseases
Journal of Virology
Journal of Bacteriology

Lancet
Science
Nature
Vaccine
Parameters
Jane's Intelligence Review
Jane's Intelligence Digest
TIME
Newsweek
US News & World Report
The New Yorker
The Economist
The New York Times
The Washington Post
The Times(The Sunday Times)
The Independent
The Guardian(The Observer)
The Daily Telegraph(The Sunday Telegraph)
BBC(web)

CNN(web)
ABC(web)
NBC(web)

『生物化学兵器』（和気朗、中公新書、一九八四）
『生物化学兵器』（S・ローズ、みすず書房、一九七〇）
『生物化学兵器』（岡芳輝、教育社、一九七八）
『生物化学兵器』（テンペスト／小川和久訳、啓正社、二〇〇〇）
『オウムの生物化学兵器』（石倉俊治、読売新聞社、一九九六）
『バイオハザード』（ケン・アリベック、二見書房、一九九九）
『細菌戦争の世紀』（トム・マンゴールド&ジェフ・ゴールドバーグ、原書房、二〇〇〇）
『悪魔の生物学』（エド・レジス、河出書房新社、二〇〇一）
『生物化学・毒素兵器の歴史と現状』（清水勝嘉、不二出版、一九九一）
『化学・生物兵器概論』（杜祖健・井上尚英、じほう、二〇〇一）
『中毒学概論』（杜祖健、じほう、一九九九）
『シンプル・微生物学』（東匡伸・小熊恵二、南江堂、二〇〇〇）
『消毒・滅菌ガイド』（小林寛伊、中外医学社、一九九八）
『別冊宝島495　生物災害の悪夢』（別冊宝島編集部編、宝島社、二〇〇〇）
他、日米政府機関の報道資料&HP

宝島社新書

生物兵器テロ

（せいぶつへいきてろ）

2002年1月26日　第1刷発行

著　者　黒井文太郎、村上和巳
発行人　蓮見清一
発行所　株式会社 宝島社
〒102-8388 東京都千代田区一番町25
電話：営業部03(3234)4621
編集部03(3234)3692
振替：00170-1-170829 (株)宝島社
印刷・製本：中央精版印刷株式会社

本書の無断転載を禁じます。
乱丁・落丁本はお取替えいたします。
COPYRIGHT © 2002 BY BUNTARO KUROI, KAZUMI MURAKAMI
ALL RIGHTS RESERVED
PRINTED AND BOUND IN JAPAN
ISBN 4-7966-2567-4

宝島社新書

生物兵器テロ
(せいぶつへいきてろ)

2002年1月26日　第1刷発行

著　者　黒井文太郎、村上和巳
発行人　蓮見清一
発行所　株式会社 宝島社
〒102-8388 東京都千代田区一番町25
電話：営業部03(3234)4621
編集部03(3234)3692
振替：00170-1-170829 (株)宝島社
印刷・製本：中央精版印刷株式会社

本書の無断転載を禁じます。
乱丁・落丁本はお取替えいたします。
COPYRIGHT © 2002 BY BUNTARO KUROI, KAZUMI MURAKAMI
ALL RIGHTS RESERVED
PRINTED AND BOUND IN JAPAN
ISBN 4-7966-2567-4